

令和 6 年 9 月 20 日現在

機関番号：32699

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18H00645

研究課題名（和文）無住道暁と東国をめぐる宗教文化圏の解明と基礎資料の構築

研究課題名（英文）Muju Dogyo within the Religious Cultural Sphere of the Eastern Provinces and The Production of the Basic Texts

研究代表者

土屋 有里子 (TSUCHIYA, Yuriko)

学習院女子大学・国際文化交流学部・教授

研究者番号：70339620

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、無住道暁の生涯と著作を通して、東国を中心とした鎌倉時代の仏教界の動向と僧侶間ネットワークを現地調査と資料読解により考察し、『沙石集』や『雑談集』の本文研究の成果と有機的に結びつけた。無住と東国に関わる包括的研究はいまだなく、東国という視点は従来の無住の伝記的な不明点や宗教的根幹を明確化し、『沙石集』や『雑談集』の本文解釈を深化させることにもつながった。その顕著な成果は、『『沙石集』の世界』や『無住道暁の拓く鎌倉時代』にまとめられている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通して、無住道暁の生涯と修学環境を精査することにより、鎌倉時代東国における仏教各宗の教宣活動や入宋僧の修学経路、人的交流の一部を明確化することができた。同時にそれらが鎌倉幕府や北条氏の動向と密接に結びついていたことも明らかにした。文学という分野を超えて、歴史、宗教、思想研究など諸分野と連携して「東国」を考究していくことの有益性、重要性、及び無住を核とした将来的な学際的研究の展望を示し、中世における「東国宗教文化圏」とも称すべき研究概念に、新たな意味づけと研究の方向性を提示した。

研究成果の概要（英文）：Through an examination of the life and works of Muju Dogyo, the current study, focusing particularly on the eastern provinces, investigated the trends within the Buddhist community during the Kamakura period and the networks among monks, by conducting fieldwork and analyzing various documents. This investigation was then organically linked to the textual research findings of "Shasekishu" and "Zotanshu." While there has yet to be a comprehensive study on Muju and the eastern provinces, this regional perspective of the research clarified previously unclear biographical aspects and religious foundations of Muju, further deepening the textual interpretation of "Shasekishu" and "Zotanshu." These notable findings are compiled in works such as "The World of Shasekishu" and "Expanding the Kamakura Period through Muju Dogyo's Eyes."

研究分野：日本文学

キーワード：無住道暁 『沙石集』 『雑談集』 東国 説話 鎌倉幕府 北条氏

1. 研究開始当初の背景

2011年に無住道暁700年遠忌記念として、関係する研究者による論考と基礎資料を収録した『無住 研究と資料』が刊行された。研究代表者及び研究分担者3名は全員この事業に事前の研究会から参加し、無住とその著作に関わる研究を深めてきた。無住についてはその後、愛知県の大須観音真福寺から新出資料が発見され、その成果が『無住集』(中世禅籍叢刊第五巻 2014)にまとめられ刊行された。その資料は、無住の宗教的、学問的な広がりが、中世尾張と東国を結ぶ僧侶間の大きなネットワークの中で醸成されていたことを改めて強く考えさせるものであり、尾張国と東国の寺社との関係性を考究していくことが、無住の宗教的活動、鎌倉後期の仏教界の宗を超えた僧侶の交流を解明する確かな手段であり、ひいてはそれが中世の東国を中心とした文化的宗教的活動の内実を解明する手段になり得ると考えるに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、僧侶であり、説話集編者でもあった無住道暁の生涯と著作を通して、東国を中心とした中世仏教界の動向と僧侶間ネットワーク、僧侶の学問形態とその内実、説話集編者の内面性を明らかにし、鎌倉時代の文化的宗教的内実解明の一助とすることである。以下にその細目を記す。

無住の修行経路と修学内容の明確化

無住の、特に尾張国長母寺止住以前の東国における修行関連寺院(常陸国、上野国、相模国)を調査し、宗派、法系に留意した文献調査と連動して実態を明らかにする。

東国における仏教諸宗の教宣活動の実態の明確化

鎌倉時代、浄土教系の浄土宗、浄土真宗、時宗が東国において行っていた教宣活動を整理し、常陸国における律宗との関係性を明確化して、無住若年時の宗教的な環境と、晩年にかけての一貫した影響を解明する。

尾張国と東国を結ぶ書写活動の実態の明確化及び僧侶間ネットワークの解明

尾張と東国を結ぶ寺社間、僧侶間のネットワークを、書物の往来、書写奥書の考察から解明する。

東国を中心とした文学の内容精査と無住著作との関連性の明確化

無住が若年時に関連をもった宇都宮歌壇と『新和歌集』、鹿島神宮に関わる文学的営為、ほぼ同時代に常陸国の住信によって編纂された『私聚百因縁集』(ただし成立については諸説ある)等について内容を精査する。

鎌倉政権と仏教界との関係性から見た無住の人生観の解明

無住は晩年の述懐的記述の見られる『雑談集』において、鎌倉の執権北条氏の政治的、宗教的あり方に強い興味を示している。鎌倉幕府と仏教界の動向を日本と中国の僧侶間交流も含めて再検討し、一介の僧としては不自然なまでの鎌倉政権への興味がどこからもたらされたものなのかを明らかにする。

『雑談集』注釈活動を通しての無住の内面性把握

『雑談集』について、輪読を通して新テキストの作成と注釈活動を行い、新注釈書の刊行を目指す。

中世の「東国宗教文化圏」概念への新たな視角の提示

かつて「辺境」の地として京からの視点で語られてきた東国は、中世に入り、文学や文化を発信する場として変質していった。無住とその周辺領域の文学や宗教的文化的事象を考察することにより、中世における「東国宗教文化圏」ともいう概念に、新たな意味づけと研究の方向性を提示する。

3. 研究の方法

本研究課題を遂行するために、全期間において基軸としたのは以下の点である。

無住と東国に関わる古典文学作品について精読し、内容分析、考察を行い、実地踏査によって収集した資料の読解・分析を進める。

関係する国内の神社仏閣、博物館、資料館等の諸機関において、現地踏査および資料収集調査を行う。

実地踏査における研究協力者にインタビューを実施する。

研究会を開催して、研究協力者も加えて『雑談集』の輪読、読解、研究発表を行い、新注釈書刊行に向けての新テキスト作成、注釈作業を進める。

文学以外を専門とする研究者も加えて、無住の修学と環境に関する論文集を刊行する。

研究代表者及び研究分担者の各々の興味関心に基づき、無住研究に資する研究調査を進め、成果を口頭発表や論文、書籍等にまとめる。

4. 研究成果

全体として、新型コロナウイルス感染症の影響で研究会、実地踏査等に遅延が生じ、研究期間が一年延長となった。

『雑談集』の新注釈書刊行作業の開始

『雑談集』の新注釈書作成に向けての輪読会を行った。『雑談集』については、無住の生涯や仏教的言辭について非常に有益な情報をもつにも係わらず、注釈が現時点で一書しかない。そのことが大いに無住研究を遅滞させているとの共通認識が本研究課題に関わる全員の一致するところであった。2018年度は『雑談集』の基本的な資料やテキストを収集したうえで底本を決定し、実際に冒頭部分の検討を通して注釈の方針や見通しについて討論を重ねた。2019年度からは研究協力者として新たに3名を迎えて輪読会を開催したが、新型コロナウイルス感染症の影響で、輪読会をオンラインに切り替えるまで時間を要し、2021年度からはオンラインでの輪読会を再開した。作成した凡例の加筆修正をしつつ本文作成を継続中であり、部分的に注釈作業を進めている。本研究課題の期間内に刊行に至ることはなかったが、将来的に、最新の研究成果を含めた注釈による新テキストを刊行するための、有益な基盤固めをすることが出来た。

無住を取り巻く東国の宗教的文化的事象に関する研究

群馬県世良田長楽寺、茨城県桜川市の椎尾山薬王院、伝正寺、高松家、宮城県松島の瑞巖寺等を中心に実地踏査を行い、無住の修学経路と環境について考察を行った。長楽寺は栄西の弟子である栄朝開基の寺である。無住は栄朝に直接教えを受けることはなかったが、同寺の蔵叟朗誉や一翁院豪のもとで学び、両者の入滅記事を『沙石集』に載せていることから、その関係性は長く続いたと思われる。特に寿福寺長老にもなった朗誉からは強い影響を受けていた。

無住の東国での修学を考える際に、今回特に注目したのは法身性西（法身房）の存在である。彼は常陸国における無住の師であり、真壁平四郎の在俗名で禅話が著名な人物である。入宋後松島瑞巖寺の中興開山となり、各地を巡った後に生地である真壁に戻り伝正寺を開いた。法身房はこれまで、無住が二十歳の時に『法華玄義』を教えただけの師匠という認識であったが、入宋経験を通じて無住の敬愛する師匠である東福寺の円爾弁円とも親しく、世良田の長楽寺や建長寺の蘭溪道隆などとも関係の深い人物であることが判明した。最終的には、常陸国を離れてからの無住の修行の方向性に影響を与えた可能性のある師であるとの結論を得た。また法身房がそうであったように、入宋僧が無住に及ぼした影響の重要性が今後の無住研究の骨子にもなると考え、土屋が説話文学学会大会シンポジウム『律をめぐる宗教的環境と説話文学との架橋』（2019年6月29日於名古屋大学）において、「無住と入宋僧」と題してコメンテーターを務め、「無住と日中渡航僧 三学の欣慕と宋代仏教」として論文化した。

また2021年は承久の乱勃発後800年という記念の年であったこともあり、無住が承久の乱をどのように認識していたのか考察を進めた。無住が北条氏に特別な関心を持っていることは従来から言われてきたことだが、承久の乱を改めて鎌倉幕府と朝廷の対立、首謀者である北条氏と後鳥羽院の関係から捉えなおした。「運」と比較しながら「果報」という言葉に注目すると、無住は承久の乱で敗北した後鳥羽院は果報がめでたく、乱後に太上天皇となった兄の後高倉院の果報がとばしいという聖覚の説法に同意し、乱で勝利した北条義時を果報ではなく「大運」と表現するなど、自己努力（仏道修行）が重要なファクターとなる果報がめでたい人間である後鳥羽院、ひいては自分を、果報がとばしい北条氏より高く評価していることを指摘した。

以上の東国と無住の修行や環境に関する研究成果については、執筆陣に文学以外の分野の研究者も迎えて『無住道暁の拓く鎌倉時代』という一書にまとめることが出来た。

無住著作と典拠との関係性、伝本研究、無住と中世神道に関する研究

無住著作と宋代刊行仏書に関しては、小林が考察を進めた。まず、永明延寿撰『宗鏡録』については、『沙石集』への影響を精査することで、無住が『宗鏡録』の文脈を強く意識して『沙石集』の説話構成を行っていることを指摘し、該書が無住の思想や発想の非常に深いところに影響を与えている可能性に言及した。次に、陳実撰の仏教類書『大蔵一覽集』については、『沙石集』の説話で『景德伝灯録』と『大蔵一覽集』に同話を認めるものを対象に精査した結果、当該説話には『景德伝灯録』を参照してはじめて知りうる情報が存するため、『景德伝灯録』が出典であること自体は動かないものの、各話の説話構成自体はいずれも『大蔵一覽集』に極めて近似しており、無住が『大蔵一覽集』のコンパクトな構成に倣って、『景德伝灯録』の当該部分を切り取りながら説話構成を図った可能性があること、『大蔵一覽集』は無住を『景德伝灯録』へと導く案内書、索引的役割を担った書物と思われることを指摘した。さらに、大慧宗杲の語録である『大慧普覚禅師語録』と『沙石集』との関係も調査し、無住は語録の中でもとりわけ『法語』相当部分を愛読していたとおぼしき点を指摘した。

『沙石集』の伝本研究としては、加美が考察を進めた。無住により編纂された『沙石集』の伝本について、梵舜本と大永三年本との本文を比較していくと、両伝本に共通する説話もその本文の内容は異なっている。室町時代、特に大永年間から永祿年間頃に『沙石集』は積極的に改編され、梵舜本は一六世紀の説教や唱導の場と結びつく中で生じた伝本であり、大永三年本は後の笑話集とつながるような伝本であると言える。こうした視点から見れば、梵舜本の説法へのこだわりは随所に存在し、梵舜本は説教や説法という「演劇の空間」における「笑い」を通して説教や

説法、あるいは仏事のあるべき姿をも示そうとしているのである。梵舜本と大永三年本とを比較することで初めて梵舜本の改編者の隠れた意図が看取できる。またともに東国と関係が深い僧侶によって編纂された『三国伝記』と『沙石集』の本文比較からは、ともに仏教の教えをわかりやすく示そうとする工夫が認められた。例えば、和泉式部の説話をういながら、玄棟は仏教における正しい夫婦の在り方、無住は禅の「越格」について説いている。時代という観点から見れば無住の『沙石集』は早すぎたのに対して、玄棟の『三国伝記』は室町前期という時代の潮流に合うような物語性を多分に含んだ仏教説話集を著わしていることを指摘した。

無住と中世神道、及び密教との関わりについては、伊藤が研究と調査を各地で行った。主な調査地は、高野山大学図書館、真福寺宝生院（名古屋市）、高幡不動尊金剛寺（日野市）、善通寺（香川県善通寺市）であった。一連の調査を通じて、三輪流及び実賢方の人びとの活動の実態が次第に明らかになってきた。この法脈に連なる宝篋・如実等は、立川流や神道などの密教の周縁的・異端的言説を伝えていた。無住はこれらの人びとと間接的・直接的交流があり、『沙石集』や『雑談集』に見える彼の宗門・教学上の学識は、宗の本流的なところからではなく、かかる周縁的な人びとのネットワークの所産だったことが見えてきた。その成果の一部は、論文「三輪流神道の形成」（『東アジアの王権と秩序-思想・宗教・儀礼を中心として』汲古書院、2021）、学会発表「三輪上人慶円をめぐる秘伝と密教系神道」（国際シンポジウム「聖なる秘伝-日本宗教における秘伝口伝のネットワーク」2023年03月、カリフォルニア大学パークレー校日本研究センター）等において公表した。

説話集編者としての無住道暁研究

『沙石集』は、これまで一般向けの書籍がなく、その点が普及しない要因となっていたが、専門的な要素も含みつつ、原文を現代語訳化して読者にも読みやすいように工夫した『『沙石集』の世界』という初の一般書を刊行した。無住道暁の生涯を細かに読み解き、『沙石集』の中で核となる「神と仏の中世神話」「末世の仏教界と僧侶」「女性と愛欲」「異類へのまなざし」「限りある命と極楽往生」「鎌倉幕府と東国武士」「尾張・三河の宗教世界」などをテーマとして、説話集編者としての無住を『沙石集』の内容と無住の内面性から考究し、今後の文学研究、鎌倉時代の宗教、文化、思想研究における無住の重要性を指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計26件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 伊藤聡	4. 巻 -
2. 論文標題 中世の神祇・神道 中世人にとって神とは何か	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『論点・日本史学』	6. 最初と最後の頁 134-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 土屋有里子	4. 巻 98(11)
2. 論文標題 無住と承久の乱 運 と 果報 の相剋	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 108-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 土屋有里子	4. 巻 24
2. 論文標題 「きりしとほろ上人伝」の構想 地獄太夫 から 魔往生 へ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学習院女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 伊藤聡	4. 巻 2021年5月臨時増刊号
2. 論文標題 中世神道説と修験道・陰陽道との関係	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 351-362
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤聡	4. 巻 36
2. 論文標題 崇・天譴・怪異 日本における天災と信仰	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中国 社会と文化	6. 最初と最後の頁 38-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤聡	4. 巻 863
2. 論文標題 中近世移行期における吉田神道の意義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 55-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤聡	4. 巻 71
2. 論文標題 両部神道の形成 鎌倉時代を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 智山学報	6. 最初と最後の頁 7-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤聡	4. 巻 -
2. 論文標題 第 部 (8) 「三輪流神道の形成」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 伊東貴之 編 『東アジアの王権と秩序 思想・宗教・儀礼』	6. 最初と最後の頁 415-430
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林直樹	4. 巻 -
2. 論文標題 『三国伝記』と禅律僧 「行」を志向する説話集	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 小助川元太・橋本正俊編 『室町前期の文化・社会・宗教 『三国伝記』を読みとく』	6. 最初と最後の頁 125-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加美甲多	4. 巻 -
2. 論文標題 『扶桑略記』における説話採録の方法 説話と記事とのほざまで	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『『扶桑略記』の研究』(新典社研究叢書338)	6. 最初と最後の頁 227-256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加美甲多	4. 巻 -
2. 論文標題 『沙石集』伝本の行方 梵舜本と大永三年本	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日本古典文学の研究』(新典社研究叢書345)	6. 最初と最後の頁 243-266
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加美甲多	4. 巻 -
2. 論文標題 素材としての説話 『三国伝記』と『沙石集』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 小助川元太・橋本正俊編 『室町前期の文化・社会・宗教 『三国伝記』を読みとく』	6. 最初と最後の頁 199-212
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 土屋有里子	4. 巻 55
2. 論文標題 関東における西大寺律と無住	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 説話文学研究	6. 最初と最後の頁 86-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤聡	4. 巻 -
2. 論文標題 忌部正通『神代巻口訣』と忌部神道	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 斎藤英喜・山下久夫(編)『日本書紀一三〇〇年史を問う』	6. 最初と最後の頁 224-252
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤聡	4. 巻 -
2. 論文標題 神道における宗教性と変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中島隆博・吉見俊哉・佐藤麻貴(編)『社寺会堂から探る 江戸東京の精神文化』	6. 最初と最後の頁 103-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤聡	4. 巻 -
2. 論文標題 中近世の「神道」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 伊藤聡・吉田一彦(編)『日本宗教史3 宗教の融合と分離・衝突』	6. 最初と最後の頁 125-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤聡	4. 巻 -
2. 論文標題 変貌する冥界	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 伊藤聡・佐藤文子(編)『日本宗教史5 日本宗教の信仰世界』	6. 最初と最後の頁 206-235
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加美甲多	4. 巻 -
2. 論文標題 軍記物語年表(二)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 松尾葦江編 軍記物語講座第4巻『乱世を語りつぐ』	6. 最初と最後の頁 263-280
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加美甲多	4. 巻 -
2. 論文標題 まえがき、巻4翻刻及び解説	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中根千絵・加美甲多・久留島元編著『昔物語治聞集』	6. 最初と最後の頁 3,106-127
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 土屋有里子	4. 巻 190
2. 論文標題 無住と日中渡航僧－三学の欣慕と宋代仏教－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国文学研究	6. 最初と最後の頁 41-54
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤聡	4. 巻 949
2. 論文標題 胎内五位図について 菟足神社蔵『胎内五位大事』との関連で	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学苑	6. 最初と最後の頁 384-390
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林直樹	4. 巻 10
2. 論文標題 『沙石集』と『宗鏡録』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 69-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林直樹	4. 巻 241
2. 論文標題 『沙石集』の実朝伝説－鎌倉時代における源実朝像－	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア遊学『源実朝 虚実を越えて』	6. 最初と最後の頁 145-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加美甲多	4. 巻 92
2. 論文標題 『類焼阿弥陀縁起』と『沙石集』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 同志社国文学	6. 最初と最後の頁 135-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加美甲多	4. 巻 18
2. 論文標題 中世日本文学から見える風景－説話のススメー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文学フォーラム	6. 最初と最後の頁 28-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊藤聡	4. 巻 816
2. 論文標題 中世神道・中世日本紀研究の現状	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 5-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 伊藤聡
2. 発表標題 東アジア宗教のなかの吉田神道
3. 学会等名 国際シンポジウム「日本と東アジアの 異文化交流文学史 」(立教大学)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊藤聡
2. 発表標題 三輪上人慶円をめぐる秘伝と密教系神道 (Secret Teachings of Miwa Shonin Kyoen and Estoteric Shinto)
3. 学会等名 「聖なる秘伝 日本宗教における秘伝口伝のネットワーク (Sacred Secrets: Networks of Secret Knowledge in Japanese Religions)」 Center for Japanese Studies, University of California, Berkeley (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 伊藤聡
2. 発表標題 胎内十月図の成立と展開
3. 学会等名 EJJS (ヨーロッパ日本研究協会) 第16回国際大会パネル (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 加美甲多
2. 発表標題 『沙石集』諸本における譬喩經典受容 —新たな伝本位置づけの端緒として—
3. 学会等名 日本文学協会中世部会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計11件

1. 著者名 土屋有里子 (編著)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 無住道暁の拓く鎌倉時代 (アジア遊学)	

1. 著者名 土屋有里子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 株式会社あるむ	5. 総ページ数 228
3. 書名 『沙石集』の世界	

1. 著者名 伊藤聡・斎藤英喜（編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 280
3. 書名 神道の近代 アクチュアリティを問う（アジア遊学 281）	

1. 著者名 門屋温・伊藤聡（監修）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 378
3. 書名 中世神道入門 カミとホトケの織りなす世界	

1. 著者名 伊藤聡	4. 発行年 2021年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 504
3. 書名 日本像の起源 つくられる 日本的なるもの	

1. 著者名 伊藤聡（編著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 600
3. 書名 寺院文献資料学の新展開 第十巻 神道資料の調査と研究 神道灌頂玉水流と西福寺	

1. 著者名 伊藤聡（編著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 376
3. 書名 真福寺善本叢刊 第三期（神道篇）3 御流神道	

1. 著者名 伊藤聡	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 285
3. 書名 神道の中世 伊勢神宮・吉田神道・中世日本紀	

1. 著者名 伊藤聡（編著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 488
3. 書名 真福寺善本叢刊第三期 神道篇 2 麗気記	

1. 著者名 伊藤聡（共著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 424
3. 書名 真福寺善本叢刊第三期 神道篇 1 神道古典	

1. 著者名 伊藤聡（共著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 448
3. 書名 寺院文献資料学の新展開 第一巻 寛城院の調査と研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小林 直樹 (KOBAYASHI Naoki) (40234835)	大阪公立大学・大学院文学研究科・教授 (24405)	
研究分担者	伊藤 聡 (ITO Satoshi) (90344829)	茨城大学・人文社会科学部・教授 (12101)	
研究分担者	加美 甲多 (KAMI Kota) (50783578)	跡見学園女子大学・文学部・准教授 (32401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------